

芦屋大学論叢 第77号

(令和4年8月8日)抜刷

《研究ノート》

体育授業におけるバスケットボールの工夫に関する研究

ールールの簡易化，児童への配慮，参考書籍に着目してー

石 川 峻  
村 上 佳 司



## 《研究ノート》

### 体育授業におけるバスケットボールの工夫に関する研究

— ルールの簡易化，児童への配慮，参考書籍に着目して —

石川 峻 (1)

村上 佳司 (2)

(1) 芦屋大学臨床教育学部

(2) 桃山学院教育大学人間教育学部

#### 1. 緒言

ボール運動は児童から人気のある運動領域である（廣瀬・北川，1999；石原・大崎，1989）。現在の小学校学習指導要領（文部科学省，2017a）では、「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」の3つに分類されている。その中でも「ゴール型」は，他の2つの型と比べて児童にとっては学ぶことが難しく，教師にとっては教えることが難しい（吉永，2013）。それは，同じコート内で攻撃と守備が入り交りながら攻防が展開されることから，常に相手との対応関係を意識しながらプレイすることが求められるからである（吉永，2013）。

ゴール型の代表的な種目にバスケットボールがある（村上ほか，2014）。バスケットボールは面白くて，覚えるのも，プレイするのも簡単で，しかも冬季に照明のついた屋内でできる「新しいゲーム」が必要であるということで考案された（水谷，2011）。考案当初はたった13条のルールで行われたが，現在は50条ものルールがあり，高度化している。このような，複雑で高度なゲームを，子どもの力量への配慮なしに提供すれば，得意な子どもだけが独占的にボールを支配する様相になりかねず，他の多くの子どもがゲームの面白さから絶縁した活動を強いられることとなる（岩田，2016）。

一方で，平成29年に告示された小学校学習指導要領（文部科学省，2017a）において，ボール運動のゴール型では，「ボール操作とボールを持たないときの動きによって，簡易化されたゲームをすること」が求められている。簡易化されたゲームとは，ルールや形式が一般化されたゲームを児童の発達の段階を踏まえ，実態に応じたボール操作で行うことができ，プレイヤーの人数（プレイヤーの人数を少なくしたり，攻撃側のプレイヤーの人数が守備側のプレイヤーの人数を上回るようにしたりすること），コートの広さ（奥行きや横幅など），プレイ上の制限（攻撃や守備のプレイ空間，触球方法など），ボールその他の運動用具や設備などを修正し，児童が取り組みやすいように工夫したゲームをいう（文部科学省，2017b）。また，運動が苦手な児童への配慮の例や，運動に意欲的でない児童への配慮の例も記載されている（文部科学省，2017b）。近年は教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め，かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり，早急な対策が必要であることが指摘されている（中央教育審議会，2015）。実際に現場の教員がどのような授業の工夫や配慮を行っているのか，授業作りのアイデアをどこから取得しているのかを明らかにすることは，教職歴の浅い教員やボール運動の指導が苦手な教員，今後教員を目指す学生への示唆となると考えられる。

そこで本研究では，実際に現場の教員がバスケットボールの授業において行っているルールの簡易化，苦手な児童や意欲的でない児童への配慮，参考にしている書籍等の実態を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査時期と調査対象

調査は2020年10月～2020年12月の期間で行った。小学校学習指導要領(29年告示)解説体育編(文部科学省, 2017b)では, 小学校5, 6年生からゴール型でバスケットボールを基にしたゲームが例示されている。したがって, これまでの教職経験の中で小学校5, 6年生のバスケットボールの授業を行った経験のある教員を対象に行った。

### 2.2 調査内容と調査方法

調査はGoogle Formsを用いてアンケート調査を実施した。調査の内容は「基本情報について」, 「指導の自信について」, 「その他」の3つで構成した。「基本情報について」は, 性別, 年齢, 教職歴, 体育専科の経験, バスケットボールの競技経験(学生時代の部活動や社会人チーム), バスケットボールの指導経験(体育授業以外で), バスケットボールの愛好度の項目を設定した。「その他」では, 「高学年のバスケットボールを基にしたゴール型ボール運動の授業で, メインとなるゲームでは, どのようにルールを簡易化されていますか?」(以下, ルールの簡易化と略す), 「高学年のバスケットボールを基にしたゴール型ボール運動の授業で, 『運動が苦手な児童への配慮』, 『運動に意欲的でない児童への配慮』として特に意識して行っていることがあれば記述して下さい。」(以下, 児童への配慮と略す), 「高学年のバスケットボールを基にしたゴール型ボール運動の授業を行う上で, 参考にしている書籍等(YouTubeやDVD, 動画配信サービスも含む)はありますか?ある場合は, 具体的に書籍名やサイト名も記述して下さい。」(以下, 参考書籍と略す)について自由記述の項目を設定した。なお, 作成途中で現職の小学校教員A(体育専科経験あり, 教職歴35年, 校長), B(体育専科経験あり, 教職歴37年, 校長), C(体育専科経験あり, 教職歴40年)の3名と, 小中学生を対象としたバスケットボール指導の専門家1名(中学校・高等学校保健体育科専修免許保持)に意見を聞き, 修正を加えた。4名とも本研究の主旨を十分理解した上で, アンケート項目の作成にご協力いただいた。

アンケート調査に関しては教員A, B, Cに依頼し, 回答者にアンケートのURLを直接配布してもらった。その結果, 163人から回答が得られた。記入に不備があったものを除き, 最終的に分析対象者は141人となった。なお, 「指導の自信について」の研究結果は石川・村上(2021)にて報告している。

### 2.3 分析の手続き

ルールの簡易化, 児童への配慮, 参考書籍において, 帰納的にカテゴリーを分類した。カテゴリーの分類と命名は, 大学で体育科教員養成に従事している大学教員2名で協議しながら行った。

### 2.4 倫理的配慮

本研究の対象者には研究の趣旨, 調査結果を研究の目的以外では使用しないこと, 個人情報の保護について, 文面にて説明した。その上で, 研究への協力に同意してもらえる場合は, 調査項目の1つ目に用意した「研究協力に同意していただけますか?」の「同意する」にチェックを入れてもらい, 同意を得た。なお, 本研究は桃山学院教育大学倫理審査委員会の承認(20桃教大総10-6)を得て実施した。

### 3. 結果と考察

はじめに、表1に対象者の基本情報を示した。性別は「男性」が71.6%、「女性」が28.4%であった。教職歴は「初任期」を5年以内、「中堅期」を6～15年、「熟練期」を16年以上と設定し、その結果、「初任期」は19.9%、「中堅期」は52.5%、「熟練期」は27.7%であった。体育専科の経験は、「経験あり」が17.7%、「経験なし」が82.3%であった。バスケットボールの愛好度は「好き」が51.8%、「どちらかと言えば好き」が24.1%、「どちらとも言えない」が16.3%、「どちらかと言えば嫌い」が7.1%、「嫌い」が0.7%であった。学生時代の部活動や社会人チームでのバスケットボールの競技経験は「経験あり」が46.1%、「経験なし」が53.9%、体育授業以外でのバスケットボールの指導経験は「経験あり」が41.8%、「経験なし」が58.2%であった。バスケットボールの競技経験や指導経験において、ある教員とない教員がおおよそ半分ずつ混在するのが本研究の対象者の特徴であった。

表1 対象者の基本情報

|               | 項目          | 人数 (人) | 割合 (%) |
|---------------|-------------|--------|--------|
| 性別            | 男性          | 101    | 71.6   |
|               | 女性          | 40     | 28.4   |
| 教員歴           | 初任期 (5年以内)  | 28     | 19.9   |
|               | 中堅期 (6～15年) | 74     | 52.5   |
|               | 熟練期 (16年以上) | 39     | 27.7   |
| 体育専科の経験       | 経験あり        | 25     | 17.7   |
|               | 経験なし        | 116    | 82.3   |
| バスケットボールの愛好度  | 好き          | 73     | 51.8   |
|               | どちらかと言えば好き  | 34     | 24.1   |
|               | どちらとも言えない   | 23     | 16.3   |
|               | どちらかと言えば嫌い  | 10     | 7.1    |
|               | 嫌い          | 1      | 0.7    |
| バスケットボールの競技経験 | 経験あり        | 65     | 46.1   |
|               | 経験なし        | 76     | 53.9   |
| バスケットボールの指導経験 | 経験あり        | 59     | 41.8   |
|               | 経験なし        | 82     | 58.2   |

n=141

### 3.1 ルールの簡易化

表2にルールの簡易化についての結果を示した。最も多かったのは「得点・ゴール」で20.3%であった。「ゴールに当てるだけで点数が入る」、「高いゴールと低いゴールを設け、高いゴールは2点、低いゴールは1点とする」といった記述が見られた。2番目に多かったのは「トラベリングの緩和」で18.1%であった。「トラベリングをあまり厳しく判定しない」、「ボールを持って歩いていい回数を増やす」といった記述が見られた。そして、3番目に多かったのは「人数」で15.9%であった。「3対3で行う」、「人数を減らす」といった記述が見られた。

バスケットボールは、2つのチームが一定の競技時間内で得点を争うゲームである（日本バスケットボール協会、2014）。したがって、攻撃の目的は、相手チームのゴールに得点するためにシュートをすることである（日本バスケットボール協会、2014）。しかし、他のゴール型のサッカーやハンドボールとは異なり、バスケットボールはゴール（以降、リング）が高い位置に水平に設置されていることや、サイズが小さいことから、未熟な児童がシュートを決めるのは難しいと考えられる。したがって、リングやボードに当たれば1点、リングを大きくする、移動式で高さを調節できるリングを用いて通常よりも低くするなどの得点・ルールの簡易化がなされている。

また、トラベリングとは、コート内でライブでボールを持っている者が、片足または両足を方向に関係なく、規定の範囲をこえて移動させることであり（小野・小谷、2017）、このことを犯すと相手チームに攻撃権が渡る。小学校の体育授業で、児童がこのルールを厳密に守ることは難しいことが伺える。しかし、「ボールを保持したまま位置を変えることを禁ずる」というルールは、バスケットボールが考案された当初の13条の中にも存在しており（水谷、2011）、トラベリングはバスケットボールというゲームを成立させる絶対的前提条件である（中道、2015）。したがって、体育授業の中では、制限なしにするのではなく、多くの教員が実施しているように、ある程度の緩和に留めるべきである。また、トラベリングを回避する技術としてストップやピボットがあるが、ピボット動作の未熟は、シュートやパス技能のつまづきの要因になる可能性が高く、バスケットボールの技術的特性に触れた楽しさを味わうためにも、ピボット動作の指導は重要である（後藤ほか、2000）。

3番目に多かった「人数」に関して、バスケットボールは1897年に「1チームの人数は5人とする」とされてから、5人制として普及してきた（水谷、2011）。しかし、近年は3人制の「3x3（スリー・エックス・スリー）」が2021年に開催された東京オリンピックから新種目として採用され、注目を集めている。石川ほか（2020）は、ミニバスケットボール選手を対象に3人制と5人制について比較している。そして3人制は5人制と比較してチームでの攻撃回数、ショット試投数が多く、攻撃完了率が高いこと、1人あたりの触球数やショット試投数が多いことを報告している。また、体育授業において、バスケットボールにおける人数の違いを検討した研究では、人数を減らすことにより、主観的運動強度（RAE）や移動距離（齊藤ほか、2014）、1人あたりの触球数（後藤ほか、1998；田中、1975）が増加することが報告されている。このように、ゲーム人数を減少させれば、ボールに触れることのできない児童の割合を低下させ、個人のボール操作回数を増やすことから、技能の向上に有効であると考えられ（後藤ほか、1998）、5人対5人にこだわることなく、人数を設定することが重要であると考えられる。

表2 ルールの簡易化

| カテゴリー      | 記述数 (個) | 割合 (%) |
|------------|---------|--------|
| 得点・ゴール     | 37      | 20.3   |
| トラベリングの緩和  | 33      | 18.1   |
| 人数         | 29      | 15.9   |
| ドリブルの制限    | 18      | 9.9    |
| エリア        | 14      | 7.7    |
| アウトナンバー    | 14      | 7.7    |
| ダブルドリブルの緩和 | 9       | 4.9    |
| コート        | 5       | 2.7    |
| 児童のアイディア   | 5       | 2.7    |
| パスの制限      | 3       | 1.6    |
| ディフェンスの制限  | 2       | 1.1    |
| その他        | 13      | 7.1    |
| 合計         | 182     | 100    |

### 3.2 児童への配慮

表3に児童への配慮についての結果を示した。最も多かったのが「得点・ゴール」と「チーム分け」で12.9%であった。「得点・ゴール」では、「全員パスが回ってゴールしたらボーナス」、「ゴールにボールが入らなくても、ボードに当たれば得点にするなど、得点を取りやすいようにする」といった記述があった。また、「チーム分け」では、「グループ編成で気配り心配りのできる児童と同じにする」、「技術的に優れた子とペアやチームを組ませる」といった記述が見られた。次いで多かったのは「役割」で11.0%であった。「チームの中での役割を明確にしてあげて、何をしたら良いかがわかるようにしてあげる」、「何かのプロになること（シュートのプロになり、必ずゴール下でパスをもらえるところを探して動くように）」といった記述が見られた。

「得点・ゴール」に関しては、先述したように、バスケットボールの攻撃の目的がシュートをし、得点をする点である一方で、他競技に比べて難易度が高い点から配慮がなされているようである。

「チーム分け」に関しては、ゲームではチーム間の力をどうやって同じにするかということが、児童の興味・関心を高め、意欲を引き出す上で非常に重要であり、実際にはたいへん難しい問題である（石原・大崎, 1989）。運動が苦手、運動に意欲的でない児童に対して、少しでも取り組みやすいように、チーム分けの配慮がなされていることが明らかになった。

表3 児童への配慮

| カテゴリー         | 記述数 (個) | 割合 (%) |
|---------------|---------|--------|
| 得点・ゴール        | 20      | 12.9   |
| チーム分け         | 20      | 12.9   |
| 役割            | 17      | 11.0   |
| 声かけ           | 15      | 9.7    |
| ルールの工夫        | 13      | 8.4    |
| ボールへの接触機会を増やす | 9       | 5.8    |
| 基礎技能の定着       | 8       | 5.2    |
| 成功体験          | 8       | 5.2    |
| パス制限          | 7       | 4.5    |
| ボール           | 7       | 4.5    |
| 児童同士の教え合い     | 4       | 2.6    |
| スモールステップ      | 4       | 2.6    |
| アウトナンバー       | 4       | 2.6    |
| トラベリングの緩和     | 3       | 1.9    |
| その他           | 16      | 10.3   |
| 合計            | 155     | 100    |

### 3.3 参考書籍

表4に参考書籍についての結果を示した。最も多かったのが「YouTube」で32.7%，次いで「文部科学省の資料」で22.4%，「各自治体の資料」で18.4%であった。

加登本ほか（2011）は、小学校教員の体育授業に関する悩み事について、同僚への相談、文献やホームページの活用によって解決することが多いことを報告している。また、白旗（2013）は小学校教員が体育の学習指導を行う際によく使う資料において、男女とも副読本会社の資料や単行本の書籍の割合が高いことを報告している。一方で、教職歴で比較すると、教職歴10年以下の教員では、教職歴11年目以上の教員に比べて体育のホームページの活用率が高く、学生時代に育ったICT環境の変化に起因し、手軽に情報を得られることから活用率が高いのではないかと考えられている（白幡，2013）。本研究では、「YouTube」を用いている割合が最も高かったが、スマートフォンやタブレット等のICT機器の普及により、どこでも手軽に視聴できること、近年ではプロ選手や指導の専門家なども多様な発信をされておりコンテンツが充実していること、動画で見られることにより、よりイメージすることができることなどが影響していると推察される。動画で見られるという点に関しては、DVD付きの指導書等も多く販売されているが、今後は、スマートフォン等で見られる動画教材がより有効な可能性がある。



表4 参考書籍

| カテゴリー        | 記述数 (個) | 割合 (%) |
|--------------|---------|--------|
| YouTube      | 16      | 32.7   |
| 文部科学省の資料     | 11      | 22.4   |
| 各自治体の資料      | 9       | 18.4   |
| 体育科教育の専門書    | 5       | 10.2   |
| Web サイト      | 5       | 10.2   |
| バスケットボールの専門書 | 3       | 6.1    |
| 合計           | 49      | 100    |

#### 4. まとめ

本研究では、実際に現場の教員がバスケットボールの授業において行っているルールの簡易化、苦手な児童や意欲的でない児童への配慮、参考にしてしている書籍等の実態について、以下のことが明らかになった。

- 1) ルールの簡易化については「得点・ゴール」、「トラベリングの緩和」、「人数」に関して実施している割合が高い。
- 2) 児童への配慮については「得点・ゴール」、「チーム分け」、「役割」に関して実施している割合が高い。
- 3) 参考書籍については「YouTube」、「文部科学省の資料」、「各自治体の資料」を用いている割合が高い。

これらの結果から、今後は、次の3点について検討していく必要がある。1つ目は授業用のゴールである。「得点・ゴール」に関する工夫や配慮が多いことから、バスケットボールにおける重要度がうかがえる。簡易で安全性が高く、得点する喜びを味わえるゴールの開発が必要である。2つ目はストップやピボットについての指導法である。トラベリングの緩和といったルールの工夫も必要であるが、バスケットボールの技術的特性に触れた楽しさを味わうために、トラベリングを回避するストップやピボットの指導が重要であり、児童が分かりやすく、意欲的に取り組める指導が求められる。そして最後に、体育授業のバスケットボールの指導における動画教材である。参考書籍として「YouTube」の活用する割合が最も高い。スマートフォンやタブレットで手軽に見られる動画教材が必要であることが示唆された。

## 文献

- 1) 中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について：学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて (答申).  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf)  
(参照日 2022 年 1 月 23 日).
- 2) 後藤幸弘・林修・佐伯卓也 (1998) バasketボールの教材化に関する基礎的研究：ゲーム人数ならびにコートサイズの変化に伴うゲーム内容の変容から. 実技教育研究, 12 : 73-86.
- 3) 後藤幸弘・松下健二・井上直郁 (2000) ピボットの未習熟はBasketボールにおける技術的つまずきの要因になるか：ピボット動作の巧拙とシュート・パス技能の関係から. 実技教育研究, 14 : 57-65.
- 4) 廣瀬勝弘・北川隆 (1999) 球技の分類に関する基礎的研究. スポーツ教育学研究, 19(1) : 101-111.
- 5) 石原文吉・大崎直美 (1989) 小学校におけるBasketボールの指導についての一考察. 千葉大学教育学部研究紀要, 37(2) : 71-82.
- 6) 石川峻・上田毅・橋本真 (2020) 小学生年代のBasketボールにおける3人制と5人制の比較：生体負担度, 技能・戦術, ゲーム後の主観的評価から. Basketball研究, 6 : 101-110.
- 7) 石川峻・村上佳司 (2021) 小学校体育授業におけるBasketボールの指導に関する課題の検討：初任期, 未経験教員に着目して. 運動とスポーツの科学, 27(1) : 73-82.
- 8) 岩田靖 (2016) ボール運動の教材を創る. 大修館書店, pp.2-10.
- 9) 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟 (2011) 体育授業の悩み事に関する調査研究 (その2)：悩み事の解決方法を中心として. 学校教育実践学研究, 17 : 169-174.
- 10) 水谷豊 (2011) Basketball物語：誕生と発展の系譜. 大修館書店, pp.33-46, 70-72.
- 11) 文部科学省 (2017a) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示). 東山書房.
- 12) 文部科学省 (2017b) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 体育編. 東山書房.
- 13) 村上佳司・山本忠志・市谷浩一郎・秋原悠・太田直希・小島迪子 (2014) Basketballにおける「課題ゲーム」の運動強度の検討. 天理大学学報, 65(3) : 57-69.
- 14) 中道莉央 (2015) 学校体育におけるボール運動・球技の教材に関する研究：Basketボールのトラベリングに着目して. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 65(2) : 291-301.
- 15) 日本Basketボール協会 (2014) Basketball指導教本 改訂版 上巻. 大修館書店, pp.42-45.
- 16) 小野秀二・小谷究 (2017) Basketball用語事典. 廣済堂出版, p.120.
- 17) 齊藤一彦・山口空子・津田龍佑 (2014) ゴール型教材・Basketボールにおけるゲームパフォーマンスに関する研究：人数の違いに着目して. 学校教育実践学研究, 20 : 103-108.
- 18) 白旗和也 (2013) 小学校教員の体育科学習指導と行政作成資料の活用に関する研究. スポーツ教育学研究, 32(2) : 59-72.
- 19) 田中久雄 (1975) Basketballのチーム人数の減少に伴うボール操作の変量：小・中学生について. 富山大学教育学部紀要, 23 : 123-136.
- 20) 吉永武史 (2013) ゴール型ゲームを成功に導く授業計画の条件. 体育科教育 61(2), 大修館書店, pp.14-17.